

2. マスメディアと研究者は理解し合えるのか？

岩谷 忠幸*

1. はじめに

そもそも、マスメディアと研究者が理解し合う必要があるのかという疑問があるかもしれない。マスメディアは報道の必要性が生じた際に、研究者の所へ取材に来るのであって、研究者のために報道しているわけではない。当たり前のことだが、視聴者や読者のための報道であり、その視点で物事を考えている。例えば、猛暑や大雨などの現象の要因について、マスメディアが研究者に取材に来る場合は、視聴者や読者が理解できる平易な言葉で、かつ簡潔に聞きたいのであって、研究全体を理解しようとは思っていない（すべてを理解するための時間的な余裕もない）。科学専門雑誌であれば、ある程度、詳細に記載することができるが、一般的なテレビや新聞は放送時間や掲載紙面が限られており、研究者が期待するような説明を行うことは難しい。

研究者にとって、マスメディアは自らの研究成果を国民に広く周知する効果をもつ媒体であり、報道されることによって、国民への正しい理解につながるとともに、その研究が組織内で評価されることも多いと聞く。その一方で、研究者が意図しない内容が報道されたり、明らかに間違った内容が報道されたりした経験を持つ研究者も少なくないようだ。間違った報道によって、研究者が不快な思いをするだけでなく、研究者自身が不利益を被るおそれもある。それがマスメディアの威力であり、怖さでもある。情報を受け取った国民にとっても不幸なことである。

私は研究者でもマスメディア出身でもない。大学で都市気候や局地風などの気候学を少し学んだが、気象

予報士制度が始まったことで、気象キャスターになった、気象情報の伝達者（気象コミュニケーターといってもよいかもしれない）の一人にすぎない。しかしながら、20年以上にわたってテレビの気象報道に携わり、マスメディアの状況は見てきたつもりである。また、研究者へのインタビューも数多く経験してきたことを踏まえ、マスメディアと研究者との相互理解の必要性や、気象キャスター等の伝達者の役割などについて述べたい。

2. 正確さとわかりやすさ

マスメディアにおける気象報道は、正確さとわかりやすさが求められ、とくにテレビ報道は小学5年生程度でも理解できる内容で説明するように求められている。しかし、「正確さ」と「わかりやすさ」の両立は容易ではなく、苦勞している。例えば、「降水確率50%」についてどう思うであろうか。1mm以上の降水になる確率が50%ということだが、雨が降らない確率も50%あり、このままの情報では視聴者は雨が降るのか降らないのか理解しにくい。

そこで、気象キャスターは経験的に（様々な理由はあるが）、「きょうは雨が降りそうなので傘をお持ちください」と主観的な説明をすることが多い。客観的な確率予報を、主観的な表現にすると情報が伝わりやすく、さらに具体的な行動まで伝えたほうが親切に感じる視聴者が多い。冬の長期予報において、気温が平年より高い確率が40%で、平年並みの確率が40%という予想があった場合は、「この冬の気温は平年並みか平年より高い」と客観的に表現すべきところだが、「暖冬傾向」のように主観的に伝えたほうが、表現の良し悪しはともかく、視聴者に情報が伝わりやすい側面がある。当然、気象報道は正確さを心掛けなければならないが、不確実性を含めた正確さを追求すれば、わか

* 気象キャスターネットワーク。

iwaya@weathercaster.jp

© 2015 日本気象学会

りにくくなってしまう反面、わかりやすくすることで主観的や断定的な表現になり、その結果、正確さに欠けた表現になる場合が出てしまうことがある。

3. 気象情報の目的

報道機関で従事する気象予報士の役割は、天気予報を国民にわかりやすく伝えることで、災害から人命を守ることにある。とくに緊急を要する災害情報の場合は、災害の危険が高い地域の住民に避難行動を促すために、客観的な数値を詳細に表現するのではなく、多くの情報の中から重要と思われる情報の一部を強調して主観的に伝えることも必要である。

災害の危険が迫っている場合、「なぜ起きたか？」ではなく、「早い避難」のために的確に情報を伝えることが重要になる。とは言っても、災害発生後には必ずといっていいほど、どのような要因で発生したのか説明が求められる。発達した低気圧や梅雨前線など大まかな要因の説明はできたとしても、さらに詳しいメカニズムになると、気象予報士の知識では説明するのが難しいことも多く、長年研究している研究者に頼らざるを得ない。しかし、気象予報士と研究者とのコミュニケーションは十分とはいえず、研究者から見れば、正しくないと思われる内容で気象予報士が解説していることがしばしば見うけられる。ただ、気象キャスターや気象予報士は、放送局から災害発生直後に解説を求められるため、研究者から迅速に見解が得られるかどうかは課題になると思う。

4. 強調と大げさ報道

マスメディアはキーワードを好む。猛暑や大雨の要因の説明をする場合は、「ラニーニャ現象」、「偏西風の大蛇行」、「バックビルディング」など、多くの国民にあまり知らない言葉をキーワードにすることで、視聴者の興味をひこうとする傾向がある。研究者から見れば、要因はいくつか考えられると思うが、マスメディアは制約された短い放送時間（狭い紙面）の中で説明しようとするため、あたかも要因が一つしかないかのように強調して説明することが多い。しかも、不確実性があるにも関わらず、断定的に表現することが多いため、研究者から見れば、違和感を覚えるに違いない。たとえ、複数の要因があったと理解したとしても、わかりやすさを優先するため、一つに断定したような言い方になってしまうことが多い。

こうした気象報道について、大げさ（強調されず

ぎ）に扱われていると感じる研究者も少なくないと思うが、じつは、気象報道の現場で従事する気象キャスターや気象解説業務従事者も同じように感じている。様々な職種の気象キャスターネットワーク会員に実施したアンケートでは、7割以上が「大げさな報道が多い」、「時々大げさな報道がある」、「たまに大げさな報道がある」と答えており、とくに、テレビの気象報道に携わっている人に限定すると約9割が大げさに感じているようである。「竜巻や大雨の原因を地球温暖化である」と断定するような、行き過ぎた表現もたまに見られており、気象予報士の間でも大げさな報道に感じているのではないだろうか。

また、研究者へのインタビューにおいても、テレビ報道の場合、インタビューが使われるのは15秒から30秒程度、長くても1分程度ではないだろうか。しかも、放送局が様々な情報を元に大まかな原稿を用意していることが多いため、決められたコメントを研究者から引き出そうと考えている担当者もいる。私も昔、インタビューする側として、コメントを引き出すために何度も同じような質問をしたこともあった。ある程度の経験を積んでからは、こうしたインタビュー姿勢について反省し、研究者と相談しながら修正するようになったことを覚えている。だからといっても長時間のインタビューを放送にしようすることは難しいことを研究者にも理解してもらい、15秒で何が説明できるかを考えてもらいたい。たとえば、「この冬の寒さの要因」や「寒冬と地球温暖化の関係」を15秒間のインタビューで説明してほしいと聞かれたらどう答えるだろうか。ぜひ研究者の皆さんにも考えてほしい。

5. 理解し合うことで国民にとっての良質な報道へ

情報の正確性とわかりやすさは両立できるのが最もよいが、相反するところがあるため、研究者とマスメディアの対話によって、最大公約数的な落としどころを探る必要があるのではないだろうか。正確さを損なわない程度に、できるだけわかりやすく伝える努力が欠かせない。マスメディアと研究者がお互いの立場を理解し、信頼関係を築いたうえで、コミュニケーションを取れば、正確でわかりやすい報道につながるのではないかと期待している。ただ、マスメディアの担当者は気象分野だけでなく、政治や経済、事件事故など様々な分野を扱っているため、気象学に対する理解力に限界がある。そこで、気象予報士などの伝達者（気象コミュニケーター）を活用することも有効では

ないか。とくに、日頃からテレビ局にいる気象キャスターや気象解説業務従事者は、研究者とメディアをつなぐ橋渡しの役割を担える。

一般向け普及啓発では、研究者と気象キャスターが協力した事例として、2013年に富山で実施した「富山の気候変化と県民生活を考えるシンポジウム」がある(川瀬ほか 2013)。テーマは地球温暖化であったが、研究成果を一般市民にわかりやすく伝えるため、気象キャスターと研究者が活発な議論を重ね、内容を精査した。

また、研究者自身がブログや SNS などを活用し、一般向けに直接、情報発信し、ときには報道機関の間違いを是正していくことが正確な報道につながり、研究者自身の防衛策にもなるかもしれない。研究者個人の情報発信をマスメディアが見つげ出すことはなかなか難しい場合もあるため、第3回気象気候若手研究者交流会(詳細は、釜江ほか(2013)を参照)において提案された、研究者が投稿できる速報性の高い気象解説サイト「(仮称)気象サイエンスメディアセンター」を設けるのも一つの方策ではないかと思う。

マスメディアも研究者も、そして気象キャスターも、気象災害による犠牲者をなくしたいという思いは同じである。研究者は、研究成果を天気予報の精度向上に活かすだけでなく、正確な報道に寄与することや国民の防災知識の向上に貢献することができる。マスメディアや気象キャスターは研究者とのコミュニケーションにより、相互の理解を深めることで、命を守る気象報道につながるのではないかとと思う。

6. シンポジウム後に望むこと

今回の議題について、私が発表するのはおこがましいのではないかとその思いがあったので、シンポジウムの冒頭で、私は報道記者でも研究者でもなく、あくまで、気象キャスターとして、長年、天気予報を伝えてきた気象報道の視点で発表することを強調させていただいた。聴講された皆さんにどのように伝わったかはいまでも不安ではあるが、私自身としては思いを伝えられたと思っている。

シンポジウムでの意外な点は、報道でよく使われる、「ゲリラ豪雨」と「爆弾低気圧」の表現について適切かどうかの問いへの反応である。私はどちらも不適切と感じている方が多いと思い、両者を同時に質問してしまったが、会場から別々に質問してほしいとの意見があり、適切な表現かどうか、再度、挙手しても



第1図 参加者が立ち上がって、二人一組でインタビュー模擬をしている様子。

らった。すると、ゲリラ豪雨に対しては不適切との意見が多かったが、爆弾低気圧についてはアメリカ気象学会で定義づけされたこともあり、容認する方が多く、意外だった。

シンポジウムで手ごたえを一番感じたのは、「インタビュー模擬」である。テレビのインタビュー取材では15秒から30秒程度で回答しないと放送に使いにくい。そのため、短い時間でインタビューに答える難しさを実感してもらいたいという狙いがあった。会場に集まった400名を超える研究者や気象予報士、学生などの皆さんが一斉に立ち上がって、二人一組でインタビュー模擬をしている姿は圧巻であった(第1図)。こうした経験がない研究者にとって、気象報道の一端を知っていただく機会になったのではないだろうか。

シンポジウムを振り返り、命を守る気象報道には、マスメディアと研究者とコミュニケーションが必要であるという認識を共有できたことは大変有意義であった。今後は課題の一つにも挙げさせていただいたとおり、研究者とマスメディアをつなぐ情報交換できる仕組みを構築したいと考えている。情報交換サイトがその一つであり、また、日本気象学会内に気象報道の分科会を立ち上げ、良質な気象情報につながるための活発な議論ができれば幸いである。

参考文献

釜江陽一, 川瀬宏明, 柳瀬 亘, 茂木耕作, 杉本憲彦, 木下武也, 吉田 聡, 岩谷忠幸, 江守正多, 高根雄也, 津口裕茂, 栃本英伍, 山本由佳, 大竹 潤, 山下陽介, 宇野史睦, 山崎 哲, 2013: 第3回気象気候若手研究者交

流会～若手の視点からアウトリーチ・科学コミュニケーションを考える～. 天気, 60, 681-690.
川瀬宏明, 石崎紀子, 宇野史睦, 吉兼隆生, 馬 燮銚, 木村富士男, 初鹿宏壮, 相部美佐緒, 源 将, 本谷 研,

岩谷忠幸, 田代大輔, 天達武史, 井田寛子, 2013: 研究者, 行政担当者及び気象キャスターの連携～「富山の気候変化と県民生活を考えるシンポジウム」をとおして～. 天気, 60, 625-631.
